



Title	不妊症看護における助産師の役割についての現象学的考察
Author(s)	郷司, 律子
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/76341
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (郷 司 律 子)

論文題名

不妊症看護における助産師の役割についての現象学的考察

論文内容の要旨

わが国の不妊治療は、1948年の第三者の精子提供による人工授精から始まる。その後、さらに技術は進歩して1983年に生殖補助医療(Assisted Reproductive Technology ; ART)としてはじめて、体外受精児の出生が報告された。この技術進歩は、不妊症患者に恩恵を施すとともに利用者は増加の一途をたどっている。その一方で、不妊症患者がART治療において身体的、精神的、社会的影響を受けていることが明らかになってきた。影響は治療中だけでなく不妊治療後の妊娠期間や出産、育児に及ぶことも指摘されている。

また、ART利用患者の増加に伴ってARTに特化した専門施設も増設されてきた。このことにより、不妊症看護は、治療中と治療後でケアの担当者が異なるという現状も生み出した。助産師は不妊治療後の妊娠から出産、育児のケアにおいて専門性を発揮するが、治療中の役割は明確ではないという現状がある。しかし、私は実践での不妊症患者とのかかわりで、不妊症看護において助産師としての役割が果たせるのではないかと考えていた。

本研究は、この問いに取り組んだものである。研究方法は、現象学的記述による質的研究である。研究目的は、ARTの変化の中で助産師がどのような経験をしているのか、何を感じて実践を行っているのかを現象学的に記述したうえで、不妊症看護における助産師の役割を検討することである。

研究協力者を募った結果、倫理的配慮について了承したうえで40歳代前半から60歳代前半の6人の助産師に研究協力を得た。彼女たちは助産師として自身の実践のスタイルが確立したのちに、ART利用患者の増加という変化を経験している。

6人の助産師は、不妊症看護に触れる場面で感じたことを「神経質ではなくなってもフォローが必要」、「特別扱いしない」、「カチカチで入り込めない」、「不妊の人の気持ちは暗闇の世界」、「置きざりになる」などの言葉で語っていた。それは「ケアが成り立たない」ことやどうケアをしたらいいのかわからないなどとも語られ、ケアにおける〈戸惑い〉を感じていたようであった。

それでも助産師たちは、不妊症患者と対峙してケアを見出そうとしており、その中で、「時間」という新しい視点が明らかになった。それは、不妊治療のことを「言えない」患者のとぎれた「時間」を捉える場面や「出産は出発点」、助産師は「未来のいのち」を守るなどと語り、本来連続している「時間」をつなげるようにケアしていたことから描き出された。

これらの結果から、不妊症看護において助産師が感じた〈戸惑い〉は、助産師という役割意識のもとで患者のケアを考えようとしていたことで生じていたのではないかと考えられた。したがって、不妊症看護では、助産師という役割意識を排除し、看護とは何かという視点に立つことが必要だと考える。

また、不妊症患者の経験を「時間」として捉える視点は、それまで助産師主体であった問題を患者主体の問題として捉える視点をもたせた。このことが患者の経験としての時間をとらえ、本来連続しているはずの「時間」が、時にとぎれることを患者の問題として浮かび上がらせた。

以上のことを踏まえると、不妊症看護では助産師としてという役割意識ではなく「看護」とは何かを考えて患者と向き合うことと、ケアにおいて患者の経験としての時間を捉えることが必要である。それは、患者の「時間」をつなぐケアとして意味を持つと考える。

これらのことは、不妊症看護において助産師の役割はないように思わせる。しかし、患者の経験としての時間を女性の経験としての時間と捉えると、女性の一生を支援するというウィメンズヘルスの観点から助産師の役割がみえてくる。それは、女性が自身の身体に関心を持ってセルフケアができるように、将来不妊症につながる疾患や妊娠、出産にまつわる必要な知識を提供して支援する役割が考えられる。今後、助産師として、女性が人生の中で常に相談できる存在であり続ける方法を検討していくことが展望である。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (郷 司 律 子)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	教 授 村上 靖彦
	副 査	教 授 白川 千尋
	副 査	外部審査委員 遠藤 俊子

論文審査の結果の要旨

郷司律子氏の博士論文『不妊症看護における助産師の役割についての現象学的考察』は、助産師・看護師6人へのインタビューとその現象学的な分析を中心に据えた論文であり、ケアという視点から不妊症医療について再考を求める実践的な価値に高い価値をもつ。

不妊症治療は戦後急激に発達した医療技術であり、日本では特に1989年以降急増している。助産師である郷司氏自身が臨床のなかで経験した不妊症治療中の患者への看護の難しさをもとに「不妊症治療を経験した妊婦をケアする際に助産師がどのような困難を抱えているのか」というリサーチクエスチョンがたてられている。そのうえで、著者は綿密に年代ごとの不妊症看護についての先行研究、および人類学や社会学における先行研究、さらに海外の制度の調査と先行研究の調査を行う。これによって不妊症看護においてどこまでのことがわかっており何が問いとして残されているのかが確定された。

それに続けて、リサーチクエスチョンにいたる著者自身の実践の説明と、なぜ現象学的な質的研究という方法論を取る必要があるのかが述べられ、個別の経験を聞き取ることの必要性が先行研究との関係で明らかにされている。研究協力者は、助産師、不妊症治療認定看護師、助産師で母性看護専門看護師と不妊症治療に関わるベテランのなかで多様な人材が選ばれている。不妊治療は出発点で子どもが生まれたあとの人生を視野にいれることを重視するAさん。困難事例を経て聴くことを重視するBさん、生命の操作に違和感を感じ、自然に従うプロセスを重視するCさん、「なんとなく感じられる」家族の背景を汲み取り、生命の連鎖をつなぐことを重視するDさん、置き去りになりがちな不妊症治療を受ける患者への配慮の方法について語るEさん、不妊症治療を特殊なものとみなさず死産のケアなどと同じものとしてみなすことでケアを成り立たせるFさん、というように個別多様な実践を取り出すことに成功している。

近年になって医療技術の進歩によって生み出された「病」である不妊症は、患者自身の不安やとまどいとともに、ケアする側の助産師のとまどいを生んだのだが、個別の経験と文脈に根ざしているがゆえに「とまどい」自体も多様な姿をとることを明らかにしたことに意味がある。統一的なケアのマニュアルではなく、個別の文脈を重視することの重要性が明瞭になった。

考察においては、ケア従事者が不妊症治療において感じるとまどいと、独特の時間経験、そして今後のケアへの示唆が述べられ、先行研究では明らかでなかった助産師の経験のディテールが記述されるとともに今後の実践への示唆を与える論文で、博士学位申請論文として充実した内容となっている。